
やくそく

龍川夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やくそく

【Nコード】

N7344E

【作者名】

龍川夏樹

【あらすじ】

三つに分かれたの世界で、再会を約束した二人。しかしいざ再会した親友は、自分のことを「人間」ではなく、「てんし」だと告げた。

くはじめに

遠いむかし、人類が誕生してからまだ十年ほどしかたつてなかったところ

空の彼方と地下深い場所

眩し過ぎる明るさと、暗すぎる暗黒

つまり極端に朝と夜が片寄った場所ではそれぞれで新しい世界がつくられようとしていた。

やがて完成したそれは『天界』と『地界』と名付けられた。

特別な者だけが知っている、特別な世界　そこに住むことを許されるのは中界（人間界）に住めなくなり、特別な力を与えられた数少ないものだけ　そこに住むものたちのことを『てんし』と呼ぶ。しかし、てんしには二種類の者たちが存在する。

天界に住むものたちは　天使

地界に住むものたちは　転使

誰が付けたのかは分からない。いつのまにかそう呼ぶようになっていたのだ。

時がたち、お互い住民が増えてくると、二つの世界に住むものたちは戦うようになった。

天使は、安らげる夜を求めて、転使は、明るい朝を求めて
そうなつてくると二つの種族は、いつのまにか自分たちが『力』を操ることが出来るということに気付いた。

戦いは激化していった

しかし、どうあがいても変わることはないのだと嘲笑うかのよう
に、『てんし』達の戦いに、終わりがくることはなかった。

それからたくさんの月日がたった。天界も地界も、中界もどんどん発達していき何不自由なく暮らせるようになった。しかしいまだそれぞれに朝と夜は無く、天界と地界は今でも戦い続けていた。間に挟まれていた中界はその立場に嫌気がさし、自然と関わることをやめていき、その結果中界には誰ひとりとしてほかの世界の存在を知るものはいなくなってしまった。

突然、何本かの光が中界に差し込むまでは……

第一話

ここは、山梨県翔第一中学校

今日はまだ桜が満開だというのに少し蒸し暑い、世の中の学生にとってはとても耐えがたくめんどくさくなるであろう日だ。しかも始業式………なんとなく、セミの鳴き声が聞こえるのは、きっと気のせいだろう。

チャイムがその日の終わりを告げた。そのとたん、先ほどまで授業中にもかかわらず、べらべらと話をしていた二人の女子が教室の隅ですでに帰ろうとしている女子に声をかけた。

「ねえ！羅月、今日ひま？あたしたちと遊ばない？」

女子は少し困ったような表情をした。

「ええっと……ごめん！今日はちよつと用事があつて……」

「そつかあ、じゃあしょうがないよ。また今度ね。」

「うん。ほんつとごめんね！じゃつまた明日っつ」

「じゃあねえ……」

断った方の女子は、そっくりいきるか切らないかのところでぐさま教室を飛び出し、学校が見えなくなる桜広場まで走った。ここは、およそ50本の桜の木が公園を取り囲んでおり、春には観光客もたくさん訪れる場所である。ただし、今日のような蒸し暑い日には誰も訪れはしないだろうが……

予想通りだった。公園には犬の散歩のおじいさんと一組のカップル、コンビニ弁当を食べているサラリーマンしかいなかった。まあ、当然の結果だろう。

（今日はほんとに無理だからさっさと帰ろうと思ってたのにこんな早く誘われるとはな〜）

公園のと真ん中で地団太を踏んでいるこの女子は、名前を鳴海羅月【なるみ らつき】という。ちなみに学校で今学期の目標は？とか聞かれると「誰とでも仲良くしよう！」と答える平凡な子供だ。今日で、中学二年生になった。

「だけど今日は絶対はずせない、とくっても大事な用事があるんだよね」

羅月は一人にまーつとにやけた。

そのとたん、羅月のすぐ隣を一台のオートバイが走りぬけた。オートバイは道路の次の角を猛スピードで曲がり、あつというまに消えていった。

「あつつつあぶつ危なかったあ……」

そう思いつつ、ほつと力を抜くと羅月はその場にぺたんと倒れこんでしまった。すると、地面になにか輪っかのようなものが落ちているのが見えた。ずるずると移動してそれを手にとって見てみると、それは腕輪だった。鉄でできているようで、表面に黄緑色のきれいな宝石がついていた。

「なんだろこれ？腕輪：だよな？というかこれって宝石！？どつどつしよう！」

辺りを見回しても探していそうな人はどこにもいなかった。羅月がどうしようときよろきよろしている、犬の散歩をしていたおじいさんが声をかけてきた。

「お嬢さん大丈夫じゃったか？さっきのバイク、常識知らずじゃの」。人がおるのに突っ込んできおった。全く最近の若いやつは……」

「えっ？ああ、そうですよねえ……私もそう思います。最近の世の中はどうなっただしょうか？危なすぎますよ。同じ若い者としてまったくもって理解できません。」

「ほほう、なかなか言うのう、その心が大切なんじや。気に入った！話が合いそうじゃが、どうじゃ？これから家でお茶でもしながらこれからの日本について語り明かさんかね？うちはお茶の名家での、

店をやっとなんじゃ。」

「そうですか？いいですねえ！……って、ごめんなさい！今日は大事な用事があった……」

「用事？はてさて、これからの日本より大事な用事とはどんな用事なんじゃ？」

羅月は満面の笑顔で答えた。

「昔の親友に会っんです！だからごめんなさい。急ぐのでお話はまたの機会にしてください。では、失礼します。」

そういつて、まだ諦めがつかないようなおじいさんを一人置いて、羅月は家までの道を駆けていった。

家に着いた羅月は群がってくるちびっこ達を押しつけて靴を脱ぐと、自分のロッカーに入れた。その後すぐに部屋に行き、着替えを済ませて食堂にいった。

……さて、ここで羅月の「家」について、少し疑問には思わないだろうか？

群がってくるちびっこ 自分のロッカー 食堂。

羅月は生まれてすぐに、捨てられていたところを児童養護施設「神風園」（しんふうえん）の園長に拾われ、今まで育ててきたのだった。

そんな身の上の羅月が、今まで一度も曲がることなく、素直に成長していった事は、職員たちの中での謎でもあった。

5歳の春、羅月は同い年の少女、日向深砂【ひゅうが みさこ】に出会った。

深砂は、親と一緒に住めなくなったという理由で預けられた。

親に裏切られたということからか、暗く沈んでいた深砂はなかなかみんなに心を開けなかった。ほとんどの人が深砂の態度に苛立ちを隠せず、無視するようになっていった中、羅月だけは粘り強く深砂

と向き合い、徐々にその心を開かせていった。やがて深砂は明るさを取り戻し、二人は常に行動を共にするようになり、まわりから「親友」と呼ばれるまでに仲良くなった。

しかし、二人が十一歳、小学校五年生の終わりに、深砂の親が深砂を引き取りたいと言ってきた。深砂はいまさら、と言って取り合わなかったが、羅月は親元に帰れるなら、と戻るように勧めた。深砂は羅月に推されるがままに親のところへ帰ることを決めた。

そして二人は「3年後、もう一度ここで会おう。」という約束をかわし、離れ離れになった。深砂はお互いを頼って違う学校で孤立してはいけないからと、住所や電話番号は誰にも教えず、自分も連絡はしないと言い切った。それから三年間、本当に二人は一度も接触をすることなく毎日を過ごしてきたのだ。

そして、今日はあの日からちょうど三年後、二人が再会を約束した日である。学校があってもいいようにと、時間は午後4時にしてある。羅月はそこからご飯でも食べに行けばいいだろうと思っていた。一時期、深砂は意外と近くにいないかと考えたこともあったが、さっき言ったとおり二人は一度も会うことはなかった。

食堂に行った羅月はご飯を食べ、まだ午後二時だというのに、風神園を飛び出していった。後ろから先生の声が聞こえた。

「ちよつと、羅月ちゃん？浮かれてないで早めに帰るのよ！気を付けてね。」

「はいはい！じゃあ、いつてきまーす。深砂にはよろしく言ってくからねー」

羅月は今日をとてもしみにしていた。なにしろ、小さい頃の「親友」に会うのだから。

再会する約束をした場所は、鳥が浜という砂浜だ。

ここはなかなかの絶景なのだが季節的に今は春、いくら暑いとはい

え泳ぐ人もおらず、桜広場と同じく人はほとんどいなかった。

「やっぱり早かったよな……」

砂浜に腰を下ろした羅月は砂をすくっては落とす、すくっては落とすを繰り返していた。

第二話

「遅いなあ……」

腕時計はもうすでに午後六時をまわっていた。太陽はまだまだサンサンと輝いている。

暑い……

まぶしい……

そんな輝く太陽を見ると、羅月は余計に気持ちしが沈んでいくのを感じた。

「遅いなあ、何かあったのかな……」

もしかして忘れちゃったんじゃない……

不安になってくる気持ちに対し、羅月はぶんぶんと首を横に振り、キツと太陽をにらんだ。

「深砂は絶対に来るんだから！約束を破るような子じゃないもん。」
気合を入れようと勢いよく立ち上がると、周りの砂と一緒に舞い上がり、音も立てずさらさらと落ちていった。

トスッ

ふと足元を見ると、そこには昼間に拾った腕輪が落ちている。
それを拾い上げて、羅月は首をひねった。

「これ、どうしようかな……」

困ったな、こちら辺には交番ってないんだよなあ……いつそのこと、海に流しちゃえば楽だね。 いや！だめだめ！たく、なんてこと考えてるのよ……持ち主の人困ってるかもしれないし……

羅月の心の中の葛藤はひたすら続いた。

「うーん。それにしてもきれいだなあ……」

太陽の光に反射する腕輪はきらきらと輝いていて、まるで満月の日の月の光のような光を放っていた。その光は早くつけると急かしているように、羅月には見えた。

「一回くらいはつけてみてもいいよね…」

と、羅月はスツと腕輪を腕につけた。

自分の手首で月が光ってる…そんな錯覚さえ起こすほど、その腕輪は魅力的な光を放っていた。

羅月は無意識のうちに、腕で光る月を今まさに沈みかけようとしている太陽へとかざそうとした。

その瞬間

砂浜の砂を巻き上げるような大風が吹いた。飛び交う砂の中には、眠りを邪魔された貝やカニといった物まで舞っている。

波に大きな波紋が広がる。

羅月がいる場所だけが孤立している。

その周りだけは何も舞ってはいない。風が吹いていないのだ。

静かだなあ

台風が目ってこういう感じのことを指すんだろうなあ。

頭がぼうつとする。

わたしはなにをしていたんだっけ？

自分が何をしていたのか分からない。いや、分からなくていいという気になっているのか。

「羅月！」

砂の中から誰かの呼ぶ声がする。

だれ？

「だめ！羅月、腕輪を……」

腕輪が……なに？

「腕輪を外して！早く！」

はずすの？こんなにきれいなのに？どうして？

「早くして！」

砂の舞い散る中、羅月の目に一瞬、ほんの一瞬だけこっちに向かつて必死に叫んでいる人影が見えた。

羅月の頭が次第にはつきりしてくる。と、同時に喜びが湧き上がってくる

見間違えるはずが、無い

あれは

「羅月！」

「みさこ・・・」

「羅月！」

会えてうれしい。ずっと会いたかった。
なのに。

羅月はその場に膝をついた。深砂のほうを見てにこりと微笑む。その目からは涙がこぼれていた。そのまま羅月は砂浜に倒れこんでしまった。

風は止み、辺りは静まりかえった。

「羅月……」

あわてる様子も無く、ゆつくりと深砂は羅月へと近づいてゆく。その足元で、風に飛ばされていたカニが急いで「家」に帰ろうとしていた。

倒れている羅月の傍らに来た深砂はつぶやいた。

「ごめん、羅月……」

太陽が沈んだ。

辺りが暗闇に包まれる。深砂は羅月をひょいと抱き上げた。羅月は細身ではあるが、深砂はより華奢な体つきをしている。また、髪が長く、すっとした美形の顔はさらにこの光景の奇妙さを強調させている。

「守るから。必ず。」

羅月の顔をしっかりと見つめ、深砂は強い口調で言った。

「ミサ。」

ふいに後ろから透き通った低い声が聞こえた。何の光も無いため、姿は見えない。

「ちゃんと力を吸収させられたの？」

「うん。でも、やっぱり体が耐えられなかったみたいで気絶しちゃった。」

何も無い暗闇に、二人の声が響く。ただ一つ、腕輪の光だけが燦つた光を放っている。

「仕方ないよ。人間なんだから。」

「うん。今からじじ様の所に連れて行く。」

「分かった。気をつけてね。じゃあまた連絡するよ。」

ヒュウ

風の音がした。

「またね。」

深砂が歩き出す。静まり返った夜の闇に、今度は深砂の足音だけが静かに響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7344e/>

やくそく

2010年11月7日08時14分発行